土師さんは、明治36年に土浦で生まれ昭和初年に土浦を離れ、以後現在に至るまで東京にお住いになっておられますが、私達の機関誌「桜川」第一号をお読みになり、昔日の土浦を思い出して、本誌に寄稿して下さいました。

ふるさと土浦

土師芳雄

西に筑波の紫峰を望み、東には点々と白帆浮ぶ霞ケ浦。そして街中をゆったりと流れる桜川。この美しい緑ときれいな水に抱かれた水郷土浦、うるおいのあるしっとりとした静かな街土浦、これが土浦で生まれ、少年時代を過し離郷後四十余年にも垂んとする今日でも瞼を閉づれば生々とよみがえってくる私のふるさと土浦のイメージであります。

この様な自然のよい環境に恵まれた土浦で育った腕白時代を回顧するとき、四季それぞれの楽しかった行事や遊びのことどもが走馬灯のように頭を駆け廻るのであり そのひとつひとつに限りなき愛着を感ずるのであります。

例えば、二月ともなると小松の西子ケ岡公園で眼下に霞ケ浦を眺めながら梅を賞でひさごを肩に杖引く俳人の群を見つつ名物団子を食い、三月を迎えれば土筆が芽を出す桜川堤、悪童連とよもぎを摘んで母への土産は節句の草餅となり、この頃ともなると桜川には大町附近から大和町にかけて幾十となく両岸に四ツ手小屋が並んで、サイ、鮒、鯉等々が大量にかかり時には一つの小屋で一晩に四ー五十貫（一五〇〜二〇〇キロ）もとれたという自慢話を聞いたこともありました。

当時流行（大正初期）した民謡で

「土浦名所も数ある中で春は桜咲く桜川
　サイの刺身（つくりみ）四ツ手の小屋で
　寝まり　寝まらず飲み明す
　空も心もかすみ浦　ドンドン」

（これは春の部で夏、秋、冬もありますが歌詞失念略）

などは如何にも水郷に相応しい情緒があふれて居るではありませんか。この頃になりますと桜川の堤には延々数里（十数キロ）にわたり数千本の桜で花のトンネルがで